

# 今、授業改革が始まる！

## 平成30年度 土佐市立蓮池小学校版

# 国語科における資質・能力の育成を目指した授業づくりのポイント

## 資質・能力を育む「深い学び」を明確にする教材分析 (「やまなし」「イーハトーヴの夢」 光村図書六年)

- 本単元では、物語「やまなし」と宮沢賢治の伝記「イーハトーヴの夢」を教材として位置付けた。宮沢賢治の作品世界とその生き方・考え方を重ね、自分の考えを深めていく学習が展開できる。また、当初から並行読書を行っていた宮沢賢治の作品群は、単元終盤の表現活動で扱う。
- 中心教材「やまなし」は、額縁構造によって二つのタイプの文章から成り立っている。すなわち、「私」による一人称視点で書かれた外枠、三人称の客観的な視点によって書かれた2枚の幻灯である。また、「かのにの親子」の会話を軸に様々な小動物や植物が登場し、色鮮やかな情景が描かれている。しかし、単なる「かのにの親子の物語」ではなく、「五月」と「十二月」の二つの幻想世界が「生と死」「光と影」「奪われる命と与えられる自然の恵み」などが対比され、人間世界や人間を取り巻く大きな自然・宇宙が象徴的に表現されている。また、川の底の様子や出来事を作者なりの描写で「幻灯」として表現したものであるということや、そこに使われる造語などの独創的表現、擬態語・擬声語などから、作者自身の内面を映し出されており、作者を意識して作品を読むのに適した教材であるといえる。
- 本教材の学習で働かせる言葉による見方・考え方は、「場面と場面」さらには「作品と作品」を『繋げて(関連付けて)自分なりの感想・意見を持つこと』と捉えた。具体的には、中心教材「やまなし」での『場面や言葉を比較(対比)して読む』『言葉のイメージを関連付けて読む』といった【自力読みの観点】の習得と、「イーハトーヴの夢」「やまなし」から読み取った賢治の理想をもとに自分なりの感想・意見を「賢治作品の新聞づくり」で表現することである。



## よき学びを実感させる授業展開の工夫

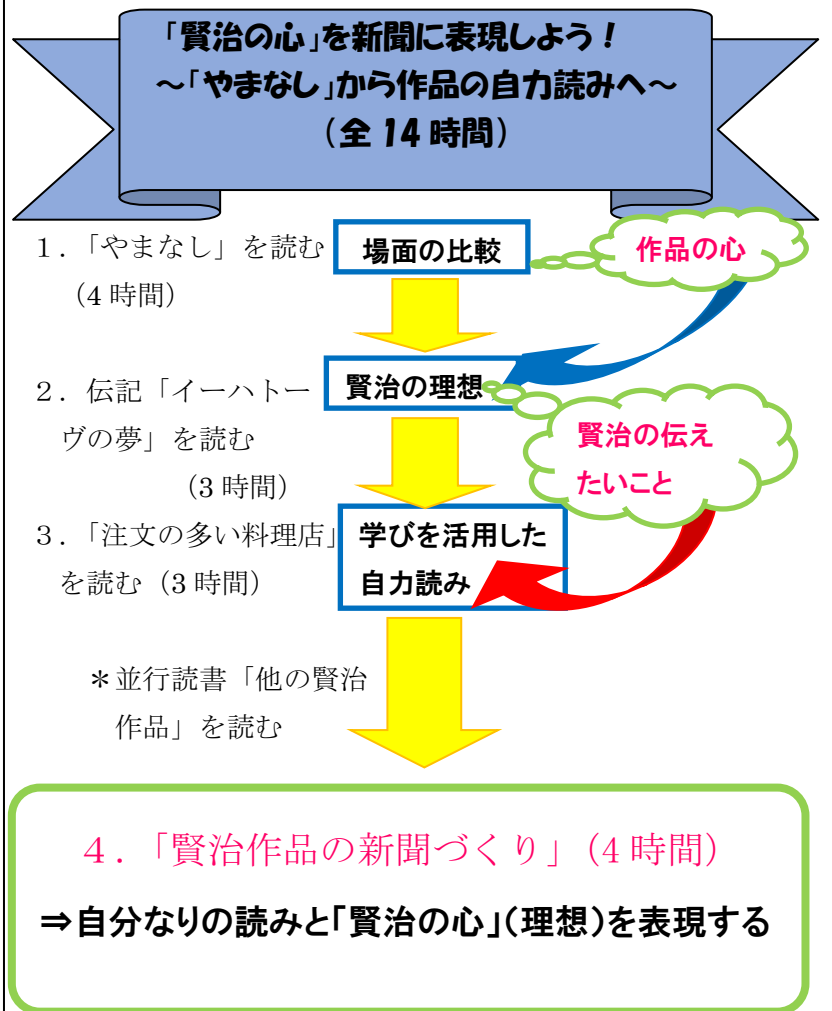
本校研究テーマの具現化として「比較」「自己決定」の場や「自分なりの表現活動」の場を意図的に設けることで、児童の主体的・対話的な態度を引き出す授業展開を工夫した。具体的には学習の終盤に「賢治作品の新聞づくり」の言語活動を設定する。「作品構造を捉える」・「対比やおもしろい表現に気を付けて読む」・「作品のテーマを考える」といったこれまでに本校で学んできた＜自力読みの観点＞を駆使し、自分なりの読みを表現させた。

＜見方・考え方を働かせた言語活動の繰り返しによる読みを鍛える場＞

- (1) 作品の設定や場面構成を押さえた後、「五月」と「十二月」の幻灯を対比して読み、共通点や相違点について感じたことを交流し、題名「やまなし」について自分なりの考えをもつことができるようにする。その際、観点として①対比しているところ、②表現のおもしろいところの二つを押さえる。
- (2) 伝記「イーハトーヴの夢」を読み、賢治の生き方や考え方が表れている象徴的な表現に着目する。三つめの観点として③賢治の伝えたいことについて考え、次時からの活動につなげていく。【読みを鍛える場①】
- (3) 教師の提示したモデル(「やまなし新聞」)や代表作「注文の多い料理店」を読み、既習の「やまなし」「イーハトーヴの夢」と繋げて賢治の伝えたいことについて考える。【読みを鍛える場②】
- (4) 並行読書した賢治の本から選んだ1冊で新聞を作成する。まず既習の読みの観点(上述の①～③)を活用した自力読みをノートに書き付け、それをもとに「賢治作品の新聞」として仕上げる。【読みを鍛える場③】



新聞は6年宮沢賢治新聞集とし、市民図書館に置かせていただくこととした。



学習した読みの観点をういた「自力読みノート」と成果物「賢治の〇〇新聞」の対応

## 子供の変容をどう見取るのか

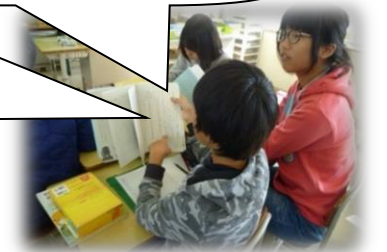
～子供を見取る場とその実際～

本単元だけでなく本校で培った読みの力を、授業のどのような場でもどのように見取るのかを明確にした。

1. 授業での振り返りから (「注文の多い料理店」(10/14時間))

この二人の紳士を通して賢治の伝えたいことは…

- お金だけじゃない値打ちがあることを伝えている。
- 自然と命の大切さを伝えている。
- 田舎やそこで生きる人々の大切さを伝えている。



【本文の具体的な文章をもとにして読み深めた後、作品のテーマを自分の言葉で抽象化することができたかを見取る】

2. 学習した読みの観点を活用した自力読みから  
並行読書で読み広げた賢治の本を、本学年までで培った＜読みの観点＞を活用して「自力読み」したノート例。そこでの自分なりの読みをもとに、新聞に再構成し直した例を示す。

【成果物を使って、既習の＜自力読みの観点＞が新聞づくりに活かされているかを見取る】